



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 号外. 京大広報 2009, 0904s: 2865-2872

ISSUE DATE:

2009-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196442>

RIGHT:



京大広報

号外

2009.4

目次

〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば	2866
修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職) 学位授与式における総長のことば	2868
博士学位授与式における総長のことば	2869

〈大学の動き〉

平成20年度卒業式	2871
平成20年度修士学位・修士(専門職)学位・ 法務博士(専門職)学位授与式	2872
博士学位授与式	2872



平成20年度 卒業式

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成21年3月24日

総長 松 本 紘

本日、卒業される2,767名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、尾池和夫前総長ならびに名誉教授、ご列席の副学長、学部長、部局長とともに、皆さんのご卒業を心からお祝いたします。あわせて卒業生をこれまで支えてこられたご家族ならびに関係者の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

京都大学の卒業生はこれまで世界中で活躍してきましたが、皆さんを含めて卒業生の累計は、京都大学の112年の歴史において、182,538名となりました。皆さんには、およそ18万名の先輩がいることになります。

社会人として活躍する道を選ばれた皆さん、進学して学問の道を究めようとする皆さん、さまざまな道へ、今、第一步を踏み出そうとしている皆さんは、それぞれの感慨にひたっていることと思います。皆さんの多くは、2004年4月に京都大学が国立大学法人となった後、2005年の入学生になりますが、本学においては法人化後、すでに激動の5年目が過ぎようとしています。皆さんにとっては、4年間あるいはそれ以上の年月を過ごしたこの京都大学が、明日からは母校になります。今日、大学の門を出るとき、歩みを止め、皆さんが学んだ大学を振り返ってみてください。皆さんのなかに、4年間の思い出が鮮やかに蘇ることと思います。

私は、大学が皆さんの人生の基軸になるよう願っています。皆さんは、卒業した後にも多くの試練に直面することと思いますが、そのときには、大学で教えを受けた先生や先輩、ともに学んだ友人との議論を思い出してください。そこから試練打開の展望やアイデアが得られることと思います。

英語では卒業式を、開始を意味する commencement と呼ぶように、卒業は同時に新たな旅立ちを意味します。社会人として旅立つにせよ、進学するにせよ、この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタート



ラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らう場として、同窓会活動の場として、生涯の学習の場として、京都大学を人生の基軸とし、積極的に活用していただけることを総長として願っています。

卒業にあたり、私から皆さんに^{はなむけ}贈言葉をお贈りしたいと思います。それは、「自鍛自恃」です。「自鍛」とは自らの心と身体を鍛えてほしいということです。あのレオナルド・ダヴィンチでも「老年の欠乏を補うに足りるものを青年時代に身につけておきなさい。知恵を必要とするということを理解したら、老年に至って栄養失調にならぬよう、若いうちに勉強しなさい。」と言っています。自恃とは「自」と「^{たの}矜恃」の「恃」の二文字であり、「自らに恃むべし」ということです。江戸時代の昌平坂学問所の名塾長として知られる佐藤一斎は「士は当に己に在る者を持むべし」と言っています。他人に頼る前に、自らの内にある己自身に恃むのが筋道であると言っているのです。卒業後、これからも多くの試練や困難が皆さんを待ち構えていると思います。困難を厭わず、困難を乗り越え、それを自らを鍛えるチャンスと捉えて、恃みとなる自己を磨いてほしいと思います。また、若いときの苦労は成長の糧となります。自らを鍛え、自らに恃むべしを心がけてください。

本年は十干、十二支では「ツチノト、ウシ即ち己丑(キチュウ)」の年に当たります。十干の「己(キ、ツチノト)」は曲がりくねった糸の端を表し、乱れた糸をほぐし、糸筋を正し、乱れを正す年を意味する

そうであります。また「ツチノト」も十二支の「丑(チュウ, ウシ)」も梢の先の芽が伸び、芽が曲がりつつも伸びようとする様を表し、新しいことが起きることを予感させます。したがって「ツチノト, ウシ」に当たる今年は、まさに金融危機に端を発した混沌、混乱から脱出し、正しい方向に向けて出発する年であります。また「丑」の文字がカタカナの「ユ」と「メ」の合成のように見え、「ユメ」とも読むことができ、新しい夢も暗示しています。皆さんには、将来へ向かって「おいしい夢」を抱き、浮かれていた世の中を見直し、「牛歩」のごとく確実に歩を進める年となるよう、努力していったほしいと思います。

私は、地球だけの閉じた経済圏では、資源、食料、水、エネルギーなどの供給難に陥り、早ければ40年後に、少なくとも100年以内に安定的な成長や人類の生存でさえ難しくなるとこれまで指摘してきました。人類の未来には地球温暖化、環境、食料、資源問題が待ち構えています。最近、持続可能性(サステナビリティ)がもてはやされていますが、サステナが人口に^{かいしゃ}膾炙すれば、まるで中世時代の免罪符のように、困難が簡単に克服できるというイリュージョンを人々に与えかねないということを心配します。事態はもっと深刻なのです。そこで、私は人間社会の「サステナビリティ」よりも人類の「サバイバビリティ」こそ、今考えるべきと思っています。その観点で世界を眺めてみると、個人、組織、地域、国、世界の様々なレベルで生存が問題となる大競争時代が既に始まっています。環境や資源、エネルギーなどに関し、生存を支える科学技術の開発が問題解決に間に合うかどうか、そのスピードが極めて重要です。高い技術と勤勉さは我々日本人の美德です。それらの美德を持った日本人が、これから世界に打ち勝てるのは環境やエネルギーの技術の分野だと思います。私は省エネや節エネに加えて、低炭素社会の中で安定的にエネルギー源を確保する、有望な宇宙太陽発電所にも興味を持って研究開発に取り組んできました。今のロボット技術や半導体技術、太陽電池技術や電波技術を活かせば、宇宙に発電所をつくることも可能です。太陽系を利用する技術をつか

めば、地球という制限の中で行き詰まっている人類の将来は明るいとは私は見えています。しかし、ここで注意しないといけないのは、サバイバビリティに取り組む際、弱肉強食の世界になってはいけないということです。科学技術の知識だけに頼り、過信してはならないのです。人文学や社会科学の知恵も動員し、人々が犯しやすい欲の暴走を抑え、環境権、生存権、人間権なども十分に考慮し、共生を重視する日本の和の発想を基にした「生存学」を創生していく必要があるのです。科学技術による生存の基盤を支える「生存基盤学」を通じ、世界の生存を保証することを考え、あわせて共生を基礎とする和の精神を活かすことが、世界のサバイバビリティの実現に役立つのではないかと考えています。現代の社会は個人の能力と欲望、そして社会の能力で発展してきましたが、欲望の独走を許したことが今の金融危機の背景にあると思います。それらの問題を克服できるかどうかはわかりませんが、人間の暴走を人文学や社会科学の知恵や文化で防ぐ必要もあるのではないのでしょうか。本日卒業される皆さんには、京都大学の卒業生として、人類の生存のために日本、いや世界で指導的な役割を果たしていただきたいと思います。

最後になりましたが、卒業して社会で活躍される皆さんには、様々な場所で京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍され、さらに皆さんの母校である京都大学で学問を続ける研究者たちの応援もお願いいたします。また、約6割を占める皆さんは、修士課程に進学され、引き続き大学で研究を続けることになりますが、私は、京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように改革を続けたいと思います。

シモーヌ・ボーボワールは「人間の条件は、与えられしものを悉く越えてゆくことである」と言っています。卒業の機会のみならず、今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、からだところのバランスを大切にして、ご活躍されることを願い、京都大学学士の学位を得られた皆さんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。

修士学位・修士(専門職)学位・ 法務博士(専門職)学位授与式に おける総長のことば

平成21年3月23日

総長 松 本 紘

本日、京都大学修士の学位を授与された2,123名の皆さん、修士(専門職)の学位を授与された124名の皆さん、法務博士(専門職)の学位を授与された187名の皆さん、誠におめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、名誉教授ならびにご列席の副学長、部局長、教職員とともに、皆さんの学位取得を心からお祝い申し上げます。

人間健康科学修士、薬科学修士は今回が初めての授与となります。

これまで京都大学が授与した修士の累計は、皆さんを含め、59,110名、修士(専門職)の累計は326名、法務博士(専門職)の累計は、701名になりました。皆さんは、私が総長として初めて世に送り出す修士・専門職修士・法務博士となります。また、本日この学位授与には、607名の女性と142名の海外からの留学生が含まれています。

皆さんにとって修士課程の2年間はどのような日々だったのでしょうか。修士課程修了のいま、自らを振り返るといことは非常に大切なことです。フランスの作家アンドレ・モーロワはこう言っています。

「精神というものは、時々洗い清めて、新しく繕いなおすことが必要である。」

これまでは嫌な思い出、苦しい経験やほろ苦い失望もあったでしょう。これについてもモーロワは、「忘却なくして幸福はありえない」とも言っています。とても味わい深い言葉です。自己の修士課程での学問研究とともに、人間として自分はどのくらい成長したのだろうかと問うてみるよい機会だと思います。

学部の4年間は教養教育および専門分野の基礎教育の学習が中心であるのに対して、大学院修士課程は、自らが選んだ専門分野をさらに深く修め、その分野の専門家として自立しうる人材となる教育を受けたところです。しかし単に専門的知識を身につけたというだけでなく、専門的知識を身につけた人の果たすべき責任も負わねばなりません。すなわち、いろんな局面において、社会を導く専門家の卵として適切な判断を行い、発言し、また行動しなければ



なりません。こういったことは、真理や学理の探求を旨とする研究を通じて、一定程度、可能となってきたことと思いますが、修士修了のこのときに、それぞれが自身に厳しくそのことを問うていただきたいと思います。

修士課程において、教育を通じて多様な知にふれ、さらに最先端の研究を自ら実践することで、新たな課題をいかに設定すればよいのかという課題設定能力や、それを解決するためにどう取り組めばよいのかという問題解決能力を身につけられたことと思います。すなわち、この度、皆さんに授与された学位は、専門家の登竜門をくぐり抜けたということの証なのであります。

皆さんのなかで約4分の1の人は、これからさらに研究者や専門家になるべく、博士課程に進むことを選択され、残りの皆さんは社会で活躍することを選択されました。いずれの道に進もうとも、本学の修士課程で学んだことを基盤にして、それぞれの道で果敢に挑戦し、凛とした気概を持って、活躍していただきたいと思います。

本日の修了式にあたり、^{はなむけ}驕として皆さんに三つの言葉をお贈りします。

一つ目は、「自得自発」という言葉です。1897年、京都大学初代総長の本下廣次先生は、京都大学の初めての入学宣誓式において

「大学々生に在ては自重自敬を旨とし以て自主独立を期せざるべからず。故に諸君は既に後見を脱したる者として吾人は諸君を遇する也。因て平素の事は細大注入の主義に依らず自得自発を誘導することを務めんと欲す」

と述べておられます。本下初代総長の式辞のこの言葉が、今でも変わらず京都大学が大切にしている自由の学風のひとつの源なのです。これからの困難な時代にこそ、自得自発を旨とし、自主独立を重んじ、自ら問いを発し、常に挑戦していただきたいと思いま

す。

二つ目は、「自鍛自恃」という言葉です。自鍛とは自らを鍛え、自恃とは「自らに^{たの}恃むべし」ということで、江戸時代の昌平坂学問所の名塾長として知られる佐藤一斎は「士は当に己に在る者を恃むべし」と述べています。これからも多くの試練や困難が皆さんを待ち構えています。困難を厭わず、困難を乗り越えて、それを自らを鍛えるチャンスと捉えてみてください。今まさに米国発の未曾有の金融危機・経済不況にみまわれ、基本的な価値観や労働観、そして私たちの生活環境が大きく揺れている状況です。日本が培ってきたものづくり技術の伝統や、高い科学技術力、共生を重視する「和」の考え方、そしてその中で生まれてきた価値観の良い面、強い面を今一度思い起こすときが来ているように感じます。新しい価値観を見出し、生活の質を問い直すような、考え方の大転換が必要な時代に我々は生きているのです。この困難な状況においても、自由な発想のもと、皆さんには日本あるいは世界で指導的な役割を果たしていただきたいと思います。

三つ目は、「楽天知命」という言葉です。天与の才や境遇を楽しみ、天から自分に課せられた使命や運命を知ることです。これは易経の「自由に生きて流されず、天を楽しみて命を知る。さすれば憂うことはない」という考えで、詩人白居易はこの言葉を好み、自らを白楽天と称していました。私の総長就任直前に、長尾 真元総長からこの「楽天知命」と揮毫された書をいただきました。困難な時代

でも、先人の教えに習い、己を信じ、仕事や文化や生活を楽しむゆとりを持つことは大切だと思います。

最後になりましたが、112年の歴史のもと、京都大学では、個性豊かな「彩なす(colorful な)人材」が、綾織(warp and woof)の如く縦横に結ばれた「綾なす人間模様」をなし、その特徴としています。また、文化、文人、人文に使われる「文(ぶん)」は学問、芸術、教養を表す「あや」とも読めます。この「文(あや)」も京都大学の学問の源流であります。京都大学ではこの三つの「あや」が混然一体となって、独特の雰囲気を生み出してきました。この「あやなす大学」京都大学と、千二百年の歴史都市、京都において学んだことを日々の生活の中に活かして、人生を生き抜いてほしいと思います。

皆さんが人生の困難に直面したとき、一層の知識や経験が必要となるでしょう。その場合には、皆さんが学んだこの京都大学を思い出してください。そして気軽に大学を訪れてください。京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。この大学で出会った多くの友人や教職員が人生の基軸として皆さんの力となることを忘れないでください。

本日学位を得られた2,434名の皆さんが、それぞれの目的に合った場所を見つけ、自らの学習や研究の成果を生かして、いきいきと活躍することを願い、私のお祝いのことばとします。

本日は、誠におめでとうございます。

博士学位授与式における 総長のことば

平成21年3月23日

総長 松 本 紘

本日、新たに571名の京都大学博士が生まれました。誠におめでとうございます。ご列席の理事、副学長、部局長、教職員とともに、課程博士517名、論文博士54名の皆さんに、また、参列されたご家族、ご友人、関係者の皆様に心よりお慶び申し上げます。今回、海外からの留学生は76名、女性は101名でした。

本日、この場所で博士学位を授与されたということは、学問を志す皆さんにとって、非常に深い意義



があります。これから一生、世界中のどこにおいても第一線の専門家、研究者として通用する証をめたく獲得されたという特別な瞬間が本日この時なのです。京都大学の博士という学位に格別の誇りと気

概を持って、これからも研究に一層励んでいただきたいと思います。

1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算36,812名になりました。その中には、千円札の肖像でおなじみの野口英世博士も含まれます。野口博士は1911年に35歳で医学博士の学位を京都帝国大学から得ている、皆さんの先輩なのです。

昨年、2008年の日本の学術界の慶事のひとつは、ノーベル賞が同時に4名の日本人に授与されたということでした。皆さんご承知のとおり、受賞者のおひとりである益川敏英京都大学名誉教授は、本学の基礎物理学研究所所長として長年活躍され、本学関係者としては、6人目のノーベル賞受賞の快挙となります。益川名誉教授は、1973年本学の理学部物理学教室の助手時代、当時同じ教室の助手であった小林誠博士とともに「小林・益川理論」を提唱されました。この理論は、現在では、素粒子物理学の基礎となる「標準理論」として世界中の物理学者に認められています。1949年に日本初のノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士、そして朝永振一郎博士以来続く、京都大学の基礎物理学分野での研究の底力と伝統がよい形で継承されています。また、受賞の対象論文となった「小林・益川理論」は、今から30年以上前の業績が評価されており、お二人にとっては20歳代後半から30歳代にかけての業績であり、新しい発想に恵まれやすい年代での仕事であります。本日、博士学位を取得された多くの皆さんとも年齢的にはあまり違わない年代での業績であり、その点から、皆さんにも、ますますの自己研鑽に努め、研究の最前線で、諸先輩に続いてすばらしい成果をあげていただくことを期待しています。

私は、昨年12月上旬、益川名誉教授に同行し、ノーベル賞授賞式典に参加する機会を与えられました。スウェーデン滞在期間中、カロリンスカ研究所等の関係学術機関を訪問しました。その折、ノーベル賞関係者や式典に参加していた各国の方々に京都大学や我が国の優秀な研究者の研究内容や研究活動などを紹介してきました。一昨年、世界で初めてiPS細胞の樹立に成功した本学の山中伸弥教授をはじめ、フィールズ賞受賞者、ラスカー賞受賞者など世界的に評価の高い、京都大学日本人研究者の業績を紹介できたことは大きな喜びでした。世界的な研究開発競争、人材争奪が激化しています。京都大学は、世界的な研究拠点としての役割を十分に果たせるよう、

これからも成果の出つつある研究に対しては支援を強化したいと考えています。

このノーベル賞授賞式典への列席を通じて、強く実感できたことがあります。それは、日本の研究、そして京都大学の研究は、欧米諸国をはじめとする世界の中で、決してひけをとらない内容を持っており、とりわけ学問の源流を支える基礎研究領域においては、本学が大きな強みを有していることです。江戸時代に活躍した京都丹波出身の学者の石田梅岩は「心を研く」ことを説き、「一度、自らを疑い、本を務めること要なり」と述べています。日本と京都大学が世界に果たすべき今後の役割を考えると、本日、博士学位を取得された皆さんには、「こと」や「もの」の大本つまり本質を見つめ、本を務めるの学、すなわち「務本の学」を心得、一人、一人が自分から新しい道、新しい考え方を創り出す気概を持ってほしいと思います。福沢諭吉が中国の「宋史」から引いてよく使った「自我作古」つまり自分が歴史を作り出すという考え方は広く知られています。先日、京都大学が名誉博士号を授与いたしました Alan Kay 博士と対談して Kay 先生と私で大いに意気投合したのも「未来は予測するものでなく、自分が創り出してゆくものだ」ということでした。また、イギリスのヴィクトリア時代の宰相かつ小説家であったベンジャミン・ディズレーリは「境遇が人を創るのではない。人が境遇を創るのだ」とも言っています。このように、皆さんも未来を自ら切り開く強い信念と自信を持ってほしいと思います。そのために研究の方向をよく考え、研究成果については、今後も地域や世界の各地に発信する努力を継続していただきたいと思います。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任しました。2004年の国立大学法人化以来、京都大学は、激動する社会の構造変化の渦中にあり、大きな変革の時代を迎えています。2009年は、法人化6年目にあたり、第一期中期計画の最終年にあたりますが、来年、2010年からは、向こう6ヶ年の第二期中期計画期間に入ります。現在、新たな中期計画に向けた準備作業を新執行部において進めていますが、その中には、優秀な博士学位取得者に対する支援策の一環として、次世代の指導的教員育成と若手教員ポストの増設のために「白眉プロジェクト」創設を考えています。また多様な視点からの共同参画社会形成のための女性教職員登用や京都大学の国際化をはかるために、外国人教職員の積極的登用と勤務条件

や環境の整備も盛り込んでいます。

私は、資源に乏しく、知識や技術によって未来を創り出すために科学技術立国の推進が必要な日本において、常々残念に思っていることがあります。それは社会問題となっているオーバードクター問題に象徴されているように、日本社会が博士号取得者をうまく活用できていないのではないかとことです。これは確かに社会だけに問題があるものではありません。博士号取得者自身や博士を養成する私たち大学の側にも責任の一端があります。しかし、研究によって自らを鍛え上げてきた優秀な人材をうまく活用し、新しい価値を創りつづけていく社会の仕組みを整えていくことが、これからの日本には一層必要とされるのではないのでしょうか。その意味で、理系文系を問わず、本日学位を取得された皆さんの各方面での活躍に大いに期待するとともに、理系の方々のみならず、文系の方々も科学技術をよく理解し、それを社会システムに取り込む、人間そのものに生かすという努力をしてほしいと願っています。高い教養と専門知識を身につけた博士号取得者が社会の中で大きく羽ばたける社会の実現に向けて、大学からも積極的に提言をしていきたいと考えています。

私は、人生を樹に例えることができると考えています。大樹が育つには、若い時代に肥沃な大地で大きく根を張り、たっぷりと栄養をつける必要があります。

ます。肥沃な大地は大学であり、これから皆さん自身が作り上げる境遇です。その土壌を富ますことなく、外見のみを整え、栄養を与えるだけでは、大樹は育ちません。自らにとって必要な肥沃な大地を創り出すために、また人間力を豊かなものとするためにも、単に専門とする研究領域を深く耕していただくだけでなく、自分自身が広い視野と深い教養を身につけ、これまで以上に皆さん自身を鍛えていただきたいと思います。皆さんが、京都大学の博士として、凜とした気概をもち、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、課題解決への道程を切り拓いていかれますように願っています。

最後になりましたが、学位を得られるまでの研鑽の道程において、支援を惜しまれなかったご家族、ご友人の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思います。

本日、博士の学位を得られた皆さんの中には、これから学問の世界でさらに研究を進める方、また、社会人として、新たな職場で活躍をされる方などがおられると思いますが、これからも学術や会得した知識、智恵を通して、世界の平和と人類の福祉に貢献するという基本を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

大学の動き

平成20年度卒業式

3月24日(火)午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成20年度卒業式が挙行された。学歌斉唱の後、松本 紘総長が各学部代表に学位記を授与した。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時45分に終了した。

新学士は計2,767人であり、学部別では総合人間学部121人、文学部186人、教育学部68人、法学部330人、経済学部241人、理学部282人、医学部(医学)99人、医学部(人間健康科学)135人、薬学部80人、工学部922人、農学部303人であった。



(教育推進部)

平成20年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式

3月23日(月)午前10時から、総合体育館において、沢田敏男元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成20年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式が挙行された。松本 紘総長が各研究科、学舎、教育部代表に学位記を授与し、続いて総長の式辞があり、午前10時50分に終了した。

今年度は初めて修士(人間健康科学)および修士(薬科学)の学位を授与した。

修士課程修了者は、文学102人、教育学42人、法学18人、経済学30人、理学300人、医科学18人、人間健康科学 34人、薬学85人、薬科学10人、工学647人、農学291人、人間・環境学136人、エネルギー科

学98人、地域研究15人、情報学174人、生命科学84人、地球環境学39人の計2,123人であった。専門職学位課程修了者は、社会健康医学32人、公共政策39人、経営学53人であり、法務博士は187人であった。



(教育推進部)

博士学位授与式

3月23日(月)午後1時から、総合体育館において、松本 紘総長、副学長、理事補をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(3月23日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午後3時25分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。



学 位	課程博士	論文博士	計	学 位	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	26	6	32	博士(工学)	103	14	117
博士(教育学)	6	—	6	博士(農学)	38	9	47
博士(法学)	14	—	14	博士(人間・環境学)	39	1	40
博士(経済学)	20	3	23	博士(エネルギー科学)	9	1	10
博士(理学)	100	2	102	博士(地域研究)	12	1	13
博士(医学)	64	12	76	博士(情報学)	29	1	30
博士(医科学)	3	—	3	博士(生命科学)	11	—	11
博士(社会健康医学)	2	1	3	博士(地球環境学)	9	—	9
博士(薬学)	32	3	35	計	517	54	571

(教育推進部)